『人は生きる、それでもなお。』作・玉井秀和

とある一軒家の裏路地。家から音が漏れてくる。薄暗い。じめっとした路地。そこは忘れられた過去たちが渦巻いている。路地にはゴミバケツや忘れ物などがある。座れるような箱も捨てられている。何年も放置され、雨に打たれ、風にさらされているのだろう。

1

日暮れ時。影が長くなっている。
上手から一人の男・アラキが入ってくる。偶然ここにフラット入ってきた様子。箱を見つけ、座る。
下手からもうひとりの男・フルタが入ってくる。アラキはフルタに気がつかない。
フルタ、アラキの横で立ち止まる。
フルタ「アラキさんですね」
アラキ、唐突な声に驚き、立つ。
アラキ「、、」
フルタ「アラキさんですね」
アラキ「、、あんたは？」
フルタ「アラキさんですね」
アラキ「、、はい、、」
フルタ「お話はコガワさんから伺っております」
アラキ「、、あなたは、」
フルタ「なんでしょう」
アラキ「、あなたは誰ですか？」
フルタ「私ですか？私はフルタです。お話はコガワさんから伺っております」
アラキ「だれ、」
フルタ「私ですか？私はフルタです。お話はコガワさんから伺っております」
アラキ「あ、いや、そうじゃなくて、、その、え、誰でしたっけ？」
フルタ「私ですか？私は――」
アラキ「違う違う。ご、ごめんなさい」
フルタ「はい？」
アラキ「あ、あの、あれ、あれです。その、話を聞いたっていう」
フルタ「はい。お話は伺っております」
アラキ「うん。だから、その人は、誰なんだろうな、と」
フルタ「その人といいますと」
アラキ「ん、いやその、えっと、あなたが、話を伺った、人」
フルタ「あぁ、コガワさんのことですか？」
アラキ「そうそうそう。コガワさん。、、」
フルタ「、、が、どうかされましたか？」
アラキ「え。あ、いや、誰かな、と思って」
フルタ「私ですか？私はフルタです」
アラキ、やっちまったのリアクション。
フルタ「お話はコガワさんから伺っております」
アラキ「、、なるほど」
フルタ「これでよろしかったでしょうか」
アラキ「あぁ、それはもちろん。完璧です」
フルタ「ありがとうございます」
アラキ「、、」
間
アラキ「あ、えっと、何を聞いたんですか、その、コガワさんから」
フルタ「はい。コガワさんからは、アラキさんがここで待っていると聞いております」
アラキ「待っている？」
フルタ「はい」
アラキ「、、僕を？」
フルタ「アラキさんですよね」
アラキ「、、はい」
フルタ「はい」
間
アラキ「いや、僕じゃないんじゃないかな」
フルタ「と、いいますと」
アラキ「いや、僕は今日たまたまこの路地に入っただけなんですよ」
フルタ「待ち合わせのために、ですね」
アラキ「いいえ」
フルタ「でも、何かを待っていらっしゃったじゃないですか」
アラキ「僕がですか？」
フルタ「はい」
アラキ「え、僕がですか？」
フルタ「はい、そこで」（と箱を指差す）
アラキ「待ってませんよ。僕はただ、座ってただけです」
フルタ「何をおっしゃってるんですか。待っていたじゃありませんか」
アラキ「待ってませんよ。何を待ってたっていうんですか」
フルタ「コガワさんをです」
アラキ「待ってませんよ。そもそも、僕は知らないんですから、その、コガワっていう人を」
フルタ「何をおっしゃってるんですか。知ってるじゃありませんか」
アラキ「いや、知りませんよ。誰なんですか」
フルタ「私ですか？私はフルタです」
アラキ、驚愕の眼差し。
フルタ「何度もそういっているじゃありませんか」
アラキ「え、それはもちろんそうですけど」
フルタ「私の話、聞いてらっしゃるんですか？」
アラキ「はい。聞いてます」
フルタ「私はコガワさんから聞いているんですから」
アラキ「えっと、何をですか？」
フルタ「ですから、あなたとここで待ち合わせしているということをです。これも言いましたよね」
アラキ「あ、すみません」
フルタ「そろそろ本題に入ってもよろしいでしょうか」
アラキ「え、本題？」
フルタ「はい」
アラキ「え、ちょっと待ってください」
フルタ「なんでしょう」
アラキ「その、本当に僕なんでしょうか」

フルタ「はい？」
アラキ「その、コガワさんと約束をしているアラキさんは僕じゃないんじゃないかと」
フルタ「アラキさんなんですよね」
アラキ「あ、はい。それはそうなんですけど」
フルタ「でしたらそうです」
アラキ「他に情報は」
フルタ「情報？」
アラキ「他にアラキさんに関する情報は」
フルタ「情報といいますと」
アラキ「えー、例えば、服装とか」
フルタ「（アラキを観察しながら）薄汚れた革製のジャンパーにところどころ破れたジーンズです」
アラキ「、、なるほど。えっと年齢とかは」
フルタ「年齢。これは私の推測ですが２５くらいではないかと思われます」
アラキ「、、それは僕に関する情報ですよね」
フルタ「はい」
アラキ「違うんですよ」
フルタ「２３でしたか？」
アラキ「そうじゃなくて。僕が聞きたいのは、他にアラキさんについてコガワさんから情報をもらっていないのかってことなんですよ」
フルタ「頂いております」
アラキ「それを教えてくださいよ」
フルタ「これを渡せば分かると伺っております」
フルタ、何かのキャップなり、部品なりを渡す。
アラキ「！、」
フルタ「思い出しましたか？」
アラキ「どうしてあなたが」
フルタ「コガワさんからお預かりしたものです」
アラキ「コガワ？（と、思い出そうとする）」
フルタ「はい。あなたが待ってらしたコガワさんです」
アラキ「僕が待っていた」
フルタ「はい。あなたは以前にも、ここでコガワさんとあっておられます」
アラキ「前にも？」
フルタ「はい」
アラキ「ここで？」
フルタ「はい」
アラキ「、、、、だめだ。思い出せない」
フルタ「なにがでしょうか」
アラキ「全てだよ。あなたの言っていること全てが思い出せない。待ち合わせっているのも、コガワさんっていうのも」
フルタ「でも、あなたは待っていた」
アラキ「違う。待ってたんじゃない」
フルタ「待ってたじゃないですか」
アラキ「違う。違う」
フルタ「じゃあ、それはなんなんですか？あなたはそれを見て何かを思い出した」
アラキ「これは、、」
フルタ「思い出したんでしょう？それを見て」
アラキ「違う。思い出したわけじゃない」
フルタ「何を言ってるんですか。忘れてたんでしょう」
アラキ「違う。忘れてたんじゃない」
フルタ「忘れてたんでしょう。今の今まで。コガワさんのことを」
アラキ「コガワ？じゃあ、あの人が」
フルタ「ほら、あなたは以前ここでコガワさんとあってらっしゃる」
アラキ「違う。あれは事故だったんだ」
フルタ「今まで忘れていたんでしょう！」
アラキ「、、あなたは一体誰なんです？」
フルタ「私ですか？私はフルタです。」
暗転

2
月明かりが入る。路地裏は夜。家の中は煌々と明るい。
アラキ、路地に寝ている。
フルタ、箱に座っている。タバコを吸う。
アラキ、目覚める。
フルタ「目覚めましたか」
アラキ「ここは、、」
フルタ「ただの路地ですよ」
アラキ「あぁ」
フルタ「静かですね」
アラキ「そう、ですね」
フルタ「ムンクの叫びって知ってますか？」
アラキ「あの、頬に手をあてる奴ですか？」
フルタ「そうです。正確には耳を塞いでいるんですが」
アラキ「あぁ、。それがどうかしたんですか？」
フルタ「あれは何の叫びだと思います」
アラキ「え」
フルタ「ムンクは何の叫びを聞いたんだと思いますか」
アラキ「、、さぁ、なんでしょう」
フルタ「静寂です」
アラキ「静寂？」
フルタ「はい。ムンクは大自然の中にこだまする静寂の叫びに耳をふさいでいるのです」
アラキ「そうなんですか、」
フルタ「はい」
間
フルタ「良くなりましたか？」
アラキ「え」
フルタ「体調。悪そうだったから」
アラキ「そうですか？そう言われてみれば少し寒気がするかもしれません」
フルタ「それでしたらこちらを」
フルタ、そう言って忘れ物の毛布を渡す。
アラキ「ありがとうございます」
フルタ「あんまりご無理はなさらない方がいいですよ」
アラキ「はぁ、」
間

フルタ、タバコをもう一本取り出す。
アラキ「あの」
フルタ「はい」
アラキ「一本頂いてもよろしいでしょうか」
フルタ「あぁ、はい。どうぞ」
アラキ「すみません。あ、火も」
フルタ「あぁ、どうぞ」
アラキ「すみません」
フルタ、アラキ、タバコを吸う。まるで過去を噛み締めるように。そして噛み締められた過去は煙となって宙を漂う。
アラキ「仕事をクビになったんです」
フルタ「はい？」
アラキ「あ、いや、すみません。関係ないことなんですけど」
フルタ「構いませんよ」
アラキ「あ、、。親が死んで、物心着いた時から、母子家庭だったんですけど、その母親が死んで、僕は一人っ子だったんで、身寄りもなくて、そのせいもあってか、全然仕事に身が入らなくて、それで、、クビに、、」
フルタ「そうでしたか」
アラキ「本当に一人なんだなって、思いました。母親が死んだとき。いや、当時は思ってなかったのかもしれません。当時はなにか、もやっとした、漠然とした不安みたいなものがあって、それを後になって思い返してみたら、そういう感情だったのかなって思っているだけなのかもしれません」
フルタ「お母様がいらっしゃった頃には一人ではなかったのですか？」
アラキ「わかりません。環境は今と大して変わらないんですが、なんか、こう体の周りを纏っている薄い皮が剥がれたみたいな、なんとなくそういういったような感覚を覚えたんです」
フルタ「薄い皮」
アラキ「はい。その皮は、なんか僕とその、外っていうか外界をなにかとても薄いもので分けていたんだと思います」
フルタ「なるほど」
アラキ「すみません。関係ない話で、、」
フルタ「いえいえ」
間
フルタ「星が出てますね」
アラキ「ほんとだ」
フルタ「不思議ですね」
アラキ「何がですか？」
フルタ「あの星はもうないかもしれないんですよ」
アラキ「それは、あの、光の速さがというやつですか」
フルタ「はい。例えばあの星が1万光年離れているとしましょう。そうすると今あの星が爆発してもそれを私たち地球の人が見ることが出来るのは、1万年後なんですね。それまであの星は存在し続ける」
アラキ「もうないのに、ですか」
フルタ「そうです。もう存在しないのに、存在し続けるんです。不思議でしょう？」
アラキ「不思議ですね」
フルタ「星は好きですか？」
アラキ「え、それはどういう」
フルタ「私は星を見るのが好きなんですよ」
アラキ「あぁ」
フルタ「ついでにもう一つお話しても良いですか？」
アラキ「あ、はい」
フルタ「白鳥座はご存知ですか？」
アラキ「あの、夏の」
フルタ「はい。白鳥座で有名なのはお尻のデネブですが、私は嘴の星が好きなのです」
アラキ「嘴の星？」
フルタ「はい。アルビレオという星です」
アラキ「アルビレオ」
フルタ「アルビレオは実は二つあるのです」
アラキ「二つある、どういうことですか？」
フルタ「アルビレオは実は二つの星なのですが、その距離が近すぎて私たちの目にはひとつに見えているだけなんです」
アラキ「ひとつに見えているだけ」
フルタ「そうです。金色と青色の二つの星が交わってひとつになっているのです」
アラキ「交わってひとつに」
フルタ「空は、私たちが想像もできない世界です。もしかしたらあの暗闇にも星があるかもしれませんよ」
アラキ「僕はそんなに好きじゃないかもしれない」
フルタ「なにがですか？」
アラキ「星が、かな」
フルタ「それはまた、どうして」
アラキ「いや、なんだろう。なんか、あまりにも大きな話で訳がわかんなくなるっていうか、怖くなるっていうか」
フルタ「怖くなる」
アラキ「ええ。とてつもなく巨大なものの、中に自分もいるんだって思うと、その、自分が小さすぎるというか、なんかわかんないけど、怖くなるってうか」
フルタ「でもそれは仕方のないことですよ」
アラキ「仕方のないこと？」
フルタ「そうでしかいられないんですから」
アラキ「、、」
間
アラキ、寒いのか震え始める。
アラキ「すみません」
フルタ、聞こえなかったようだ。
アラキ「すみません」
フルタ「はい。なんでしょう」
アラキ「あの、なにか羽織るものを持っていませんか。ちょっと寒くて」
フルタ「羽織るものですか」
フルタ、あたりを探すが何も見当たらない。ので、ゴミ捨て場に落ちていたビニール的なゴミを渡す。
アラキ「あ、すみません」
フルタ「いえいえ」
間
フルタ「どうして生物は死ぬと冷たくなるんでしょうね」
アラキ「え」

フルタ「ほら、犬でも猫でも、もちろん人間でもそうですけど、死んだら冷たくなるでしょ。氷みたいに」
アラキ「ええ」
フルタ「どうしてですかね」
アラキ「さぁ」
フルタ「死ぬときは寒いんですかね」
アラキ「さぁ、どうでしょう」
フルタ「でも、死は生きている者にとって一種の冷たさをもって近づいてきますよね」
アラキ「え、それは、」
フルタ「冬のように近づいてくる。着々と私たちは冬に向けて進んでいる。誰も止まることはできない。冬はみんな寒いんです」
アラキ「、はぁ」
フルタ「寒いですか？」
アラキ「え、それはどういう、」
フルタ「冬は着込むものです。着込んで着込んで耐えるんです。ただ、じっと」
フルタ、そう言って落ちている新聞紙やらなんやらをアラキに渡す。アラキはどんどん侵食されてゆく。
アラキ「あ、ありがとうございます」
フルタ「雪が降ると、世界は死装束を羽織ります。音は凍り、静寂が叫びとなって世界に反響します。今だったものたちが静寂の中で鎮魂歌を歌います。そこは寒い世界。冷たい世界。降りそそぐ雪は躊躇なく世界を埋めていきます。それが見えなくなるまで。ずっと。川は凍り時間が止まります。今が過去にならずに今で有り続ける。過去が今になる。そしてその世界には生者と死者が漂い、溶け合う。死装束を羽織った世界は、こうして冬になるのです」
アラキ「あなたはなにが言いたいんです？」
フルタ「眠ればいいんですよ。眠れば雪が全てを埋めてくれる」
アラキ「あれは事故だったんだ」
フルタ「そうなのかもしれません」
アラキ「寒い、寒い」
フルタ「雪の結晶は綺麗な幾何学模様をしているんです」
アラキ「信じてくれ」
フルタ「それが一番都合がいいからですよ」
アラキ「寒い、寒いんだ」
フルタ「そうでしょう。あなたはとっくに冬だったんですよ」
暗転

3
朝である。露。霜。
ゆっくりと光が入ると、アラキは横になって動かない。寝ているのか、それとも、、、。
フルタ「目を覚ましてもいいんですよ」
アラキ「、、」
フルタ「アラキさん」
アラキ「、、」
フルタ「小学校中学年くらいの時、友達が死んだんですよ」
アラキ「、、」
フルタ「田舎でね。近所の川で遊んでいたんです」
アラキ「、、」
フルタ「ちょっとあたたかくなってきた頃だったと思います。雪解け水でね。増水してたんです」
アラキ「、、、」
フルタ「でも、そんなことわからないから、二人で遊んでて。魚を探してたんです。噂だけの魚を」
アラキ「、、、」
フルタ「それで、疲れてしまったので私は川原で休憩しようと流れの中を歩いて行きました。その私の背中のほうで「いた」と声がしました。でも振り向いた先には誰もいませんでした」
アラキ「、、、」
フルタ「川の流れる音がよく聞こえました。川はいつもと同じように流れているのでした」
アラキ「、、、」
フルタ「ただ、それだけの話です。それだけの話なんです」
アラキ「、、、」
間
フルタ「アラキさん」
アラキ「、、、」
フルタ「目覚めないんですか」
アラキ「、、、」
フルタ「あなたはまだ、目覚めれるはずです」
アラキ「、、、」
間
フルタ「そろそろ行きますね」
アラキ「、、、」
フルタ「長々と失礼いたしました」
アラキ「、、、」
フルタ「アラキさん」
アラキ「、、、」
フルタ「そんなところで寝てると、風邪引きますよ」
暗転

『寒い夜にはおでんが食べたい』　　作・玉井秀和

小さな部屋。6畳くらいであろうか。アパートの一室である。
しも手には台所に続くのであろう廊下がある。上手には玄関。
ここがリビング兼寝室なのだろう。ふた組みの布団はたたんである。

武夫「ただいまー」
上手から、武夫登場。仕事帰りなのだろうか。スーツである。武夫、台所に行き、飲み物を持って現れる。着替える。暑いのであろう、うちわで扇いだりする。やがてちゃぶ台の前に座り、ものを書き始める。
静、帰ってくる。
武夫「おかえり」
静「、ただいま」
静、楽な格好に着替える。
武夫、ものを書いている風を装っているが、先程から筆は進んでいない。
武夫「どこいってたの」
静「ん？　ひみつ」
武夫「あそう」
・・・・・・
静「岩瀬さんちにこの間のお礼しにいってただけ」
武夫「、、あそう」
静「なになに」
武夫「いや？」
静「えぇ？別に大丈夫だって」
武夫「なにが？」
静「えぇ？」
武夫「まぁいいけど。でもほら、安静にしとかなきゃ」
静「わかってますって。大丈夫だから」
武夫「うん」
静「ありがと」
武夫「いやいや、別に静さんを心配しているわけじゃないんですよ」
静「じゃあなんなんですか」
武夫「それはまたあれですけど」
静「なんなのよ」
間
武夫「ごはんは？」
静「食べてないの？」
武夫「うん。いっつも食べてないだろ」
静「そうね。なんか武夫さんは食べてくるもんだと思ってた。なんでだろ」
武夫「なんだそれ」
静「結構減った？」
武夫「うん」
静「今から作るんでもいい？」
武夫「いいよ」
静「ごめんね」
武夫「おなか減ったよ」
静「ちょっと待ってて」
武夫「うん」
間
静「何書いてるの？」
武夫「ん？」
静「それ」
武夫「あぁ」
静「新しいやつ？」
武夫「ん、ひみつ」
静「なんでよ」
武夫「まだ出来てないから」
静「ふーん」
武夫「できてからね」
静「そうやっていっつも見せてくんないじゃん」
武夫「そんなことないだろ」
静「そんなことありますよ」
武夫「そうだっけ」
静「そうです」
武夫「ごめん」
静「今度はみせてね」
武夫「うん」
間
武夫「そうだっけなぁ」
静「ご飯作りますね」
武夫「うん。おでんかな」
静「おでんがいいんですか？」
武夫「いや、別に」
静「なにそれ」
武夫「言ってみただけ」
静「そう」
武夫「なんでもないよ」
静「じゃ、すぐつくるから」
武夫「うん」
静、台所へ行く。
武夫、ふたたび書き出す。
慎司、帰ってくる。
武夫「おかえり」
慎司、武夫を一瞥して台所へ。戻ってきて。
慎司「メシ」
武夫「、、？」
慎司「メシは」
武夫「ん？」
慎司「、、」
武夫「どうした」
慎司「(舌打ち)」
慎司、玄関から出ていく。
武夫、玄関を見ている。

台所から静が出てきて。
静「なにぼーっとしてるんですか？」
武夫「ん？」
静「ほらほら、ちょっと机の上かたづけて」
武夫「えちょっと今途中なのに」
静「じゃあどこで食べるんですか」
武夫「ん。床？」
静「なにいってんですか。早く片付けてください。上におきますよ」
武夫「わかったって。まったく静さんはせっかちですなあ」
静「なにいってんの」
武夫、机の上を片付ける。
静「はい。おまたせしました」
武夫「あれま。おでんだ」
静「ふふん」
武夫「え、なんでおでんなの」
静「だって武夫さん好きでしょう？」
武夫「好きだけどなんで」
静「なんでしょう」
武夫「あ、でたクイズ方式」
静「ででん」
武夫「えっと。あれだろ、あのお前見るとすぐ吠える犬と仲良くなったんだろ」
静「なんですか」
武夫「違う？」
静「違いますよ。なんでそれでおでんにするんですか」
武夫「え、でも尋常じゃないくらい吠えるじゃん、あの犬」
静「そりゃ、親の敵かってくらい吠えられますけど、違います」
武夫「えっとじゃあ、あれだろ。この間応募してた温泉旅行が当たったんだろ」
静「え、なんで知ってるんですか？」
武夫「え、当たった？」
静「違います違います。なんで、温泉旅行に応募したことを知ってるんですか？」
武夫「え言ってなかったっけ」
静「言ってないですよ。驚かせてやろうと思って内緒でやったんですから」
武夫「あそうなの？」
静「なんですか？」
武夫「えだって内緒ったってここで応募はがき書いてたやつだろ？」
静「はい」
武夫「わかるだろ」
静「あなたに隠し隠しかいてたじゃありませんか」
武夫「えだって俺ここに座ってんだよ？」
静「はい」
武夫「みえるだろ」
静「、、」
武夫「なんかごめん」
静「いいですけど。温泉は外れたのでまだ当ててないですよ」
武夫「何が？」
静「なんでおでんか」
武夫「まだやんの」
静「武夫さんがあてるまでやりますよ」
武夫「ヒントヒント」
静「ヒントですか？じゃあヒントは記念日」
武夫「それもう答えじゃん」
静「違いますよ。なんの記念日かってこと」
武夫「記念日？今日？」
静「忘れたの？」
武夫「んん？（曖昧）なに？」
静「自分で思い出してください」
武夫「えー、なんだろ」
静「もう」
武夫「でもあれだね。おでんってことは相当だよね」
静「さあどうでしょう」
武夫「いや、絶対そうだね。だっておでんだもん。並大抵の記念日だったらアレとかだもん、ほら、あれ」
静「え？なにあれって」
武夫「え、だから、えっと、え、あれあれ？」
静「え、なに？　肉じゃがとか？」
武夫「違う違う。ほら、えっと、ご飯に、ケチャップに卵のやつ」
静「オムライス？」
武夫「そうそれ！」
静「えぇ。オムライス忘れてたの？」
武夫「うん。なんでだろ、王道中の王道なのに」
静「5歳児でも知ってるわよ」
武夫「5歳児が知ってるか、オムライス？」
静「知ってるわよ。好きな食べ物は何ですかって聞いたら10人に7人はオムライスって答えるんですから」
武夫「最近の5歳児はませてんなぁ」
静「すごいですよお。鼻から牛乳飲むんですって」
武夫「それはませてるとかじゃないだろ」
静「できる？」
武夫「え？」
静「鼻から牛乳」
武夫「できないよ」
静「できないの？」
武夫「できないよ。5歳児じゃないんだから」
静「えなに？歳をおうごとにその能力は衰退していくの？」
武夫「ええ？」
静「5歳児の時はできるのに、大人のあなたができないってことはそういうことじゃない？」
武夫「あぁ。まぁ、そうかなぁ？」
静「5歳児ってすごいですね」
武夫「そうだな」
間
武夫「いや、できるよ？」
静「なにがですか？」
武夫「鼻から牛乳」

静「え、出来るんですか？」
武夫「うん」
静「えじゃあ、牛乳用意しますね」
武夫「いやいやいや。そうじゃないだろ」
静「なにがですか？」
武夫「能力的にはできるけど、大人としてやらないだけだろ」
静「ああ」
武夫「そう」
静「じゃあ、5歳児のすごいところは、そこらへんを考えずに鼻から牛乳飲めることなんですね」
武夫「そういうことになるな」
静「なんか科学的な話をしましたね」
武夫「科学的かぁ？」
静「えぇ」
　間
武夫「美味しいよ」
静「本当ですか。よかった」
武夫「うん。でさ3人は何が好きなの？」
静「え？」
武夫「ほら、5歳児は10人中7人くらいはオムライスが好きなんだろ。残りの3人は何が好きなの」
静「さぁ。なんでしょうね」
武夫「おでんかな」
静「おでんが好きな5歳児はなかなかいないんじゃない？」
武夫「え、そうかな。おいしいのに」
静「おいしいですけどね。でもまだちょっと早いわよ」
武夫「確かにな。ガキにはわかんねぇかもしれないな」
静「そうですね」
　間
武夫「でも、あれだよな」
静「なに？」
武夫「やっぱりおでんってことは相当な記念日でしょ」
静「ほんとに覚えてないの？」
武夫「んん？（曖昧）」
静「どっちよそれ」
武夫「さあ」
静「もう」
　二人、おでんを食べている。
武夫「うまいうまい」
静「そんな慌てて食べないの」
武夫「だってあつい時に食べたほうが美味しいでしょ」
静「そんなすぐに冷めないわよ」
武夫「そういう問題じゃないの」
静「そうですか」
武夫「あっつ」
静「お茶持ってきますね」
武夫「うん。ありがと」
静、台所の方へ行く。
武夫、おでんを食べる。次第に箸は進まなくなっていく。箸を置く。
玄関から慎司が入ってくる。
武夫「おかえり」
慎司「、、」
・・・・・・・
武夫「おでん食うか？」
慎司「食ってきた」
武夫「そっか、、」
・・・・・・・
　間
・・・・・・・
武夫「今日、何の日か覚えてるか？」
慎司「、、なに」
武夫「、いや、いい」
慎司「あそう」
・・・・
武夫「最近学校どうだ？」
慎司「、、」
武夫「部活とか」
慎司「、、普通」
武夫「そっか。今度試合でも観に行くか？」
慎司「、、いい」
武夫「そうか」
　慎司、ふとんをひきはじめる。
武夫「寝るのか？」
慎司「、、うん」
武夫「電気消そうか？」
慎司「、、」
武夫「、、」
　慎司、寝る。
武夫「おやすみ」
武夫、電気を消す。

　明かりが入ると、武夫の姿はない。仕事に行ったのだろうか。
慎司、起きる。
静、台所からでてくる。
静「あらあら、お殿様、今日はお早いお目覚めで」
慎司「お父さんは？」
静「お仕事に行きましたよ」
慎司「ええええ」
静「どうかしたの？」
慎司「宿題聞かなきゃいけないのに」
静「自分でやりなさいよ」
慎司「違う違う。お父さんに聞かなきゃいけないの」
静「なにを？」
慎司「名前」

静「名前？だれの？」
慎司「僕の」
静「え？どういうこと？」
慎司「えっと、ほらなんで慎司なのかって」
静「あぁ、由来ね」
慎司「由来？」
静「どうしてお父さんとお母さんが慎司って名前にしたのかを聞いてくるっていう宿題なのね」
慎司「そう。由来」
静「今日までなの？」
慎司「ううん。あさってまで」
静「じゃあ、今日お父さんが帰ってきたら聞いてみたら？」
慎司「うん。お母さんは知らないの？」
静「知ってるけど、慎司ってつけたのお父さんだから折角ならお父さんから聞いたほうがいんじゃない？」
慎司「んじゃあそうする」
静「うん」
慎司「朝ごはんは？」
静「できてますよ」
慎司「おでんかな」
静「あら、よくわかったわね」
慎司「おでん！」
静「おでん好き？」
慎司「まあまあ。オムライスのほうがいい」
静「そう」
慎司「トイレ」
静「ちゃんと手洗うのよ」
慎司「はーい」
慎司、下手にはける。静、下手にはける。
武夫、帰ってくる。
武夫「ただいま」
静、下手から出てくる。
静「お帰りなさい。はやいのね」
武夫「まぁね。仕事終わったらすぐ帰ってるからね」
静「怒られないの？大丈夫？」
武夫「なんで怒られんの。仕事終わってるのに」
静「本当？」
武夫「ほんとほんと。最近は会社もあんまり残さないようにしてるのよ」
静「どうして？」
武夫「法律とかで決まってるんでしょ」
静「そうなの？」
武夫「しらないけど。検査どうだったの？」
静「順調みたい」
武夫「あほんと。そりゃよかった。でもあれだろ？あんまり暴れたりとかしちゃダメなんだろ？」
静「まぁ、それはね。ダメなんじゃない？」
武夫「気をつけなきゃな」
静「暴れませんよ」
武夫「まぁなぁ」
武夫、荷物をおいて着替える。
武夫「そういえば茂山君。奥さんと喧嘩して引っかき傷つくってたよ」
静「茂山さんってこの間来た人？」
武夫「そうそう。活発な好青年って感じの」
静「結婚してたんだ」
武夫「新婚新婚」
静「へぇ」
武夫「なんかシャンプーのメーカーでもめて喧嘩になったらしよ」
静「えぇ？」
武夫「すごいよな」
静「すごいですね。あなたなんて石鹸でいいだろって言ってましたもんね」
武夫「そうだっけ？あれ？ここにあったズボンは？」
静「洗濯しましたよ」
武夫「なんで」
静「なんでって、何日はいてるんですか」
武夫「部屋着なんだからいいじゃない」
静「苔生えてきますよ」
武夫「なんかそれ、あったかそうだな」
静「いやですよ。苔まみれのズボンなんて」
武夫「環境に優しい感じがするだろ」
静「なんですか環境って」
武夫「こう二酸化炭素がな、その光合成で酸素にかわるんだよ」
静「ズボンの苔ですか？」
武夫「そうそう。あ、でも夜しか履かないからあんまりあれなのかな」
静「夜だとダメなんですか？」
武夫「うん。ほら光がいるから」
静「光がないと力が出ないんですか？」
武夫「うん。そんな感じだろ」
静「でも嫌ですよ。洗濯とか面倒くさそうだし」
武夫「そうだな。代わりの」
静「はいはい」
静、代わりのズボンを武夫に渡す。
武夫「どうも。なんか洗いたてだといまいちしっくりこないなぁ」
静「何がですか」
武夫「なんだろ。油分が足りないのかな」
静「そりゃ洗濯で油分落としてるんですから」
武夫「なんか温もりがねぇんだよなぁ」
静「じゃあもあなたのお洋服は洗濯しません」
武夫「いやいや、そういうことじゃなくてね」
武夫、机に座り作業しようとする。
武夫「あれ？片づけた？」
静「調子良かったからしっかり掃除しちゃった」
武夫「あ、やっぱり。い草がみずみずしいもんね」
静「何、い草がみずみずしいって」
武夫「え？いつもよりテカってるっていうか、こう生命力にみなぎってるよ」

静「生命力にみなぎってる畳ってどんなのよ」
武夫「すごい苔生えてくるんじゃない？」
静「いやですよ」
武夫「確かになぁ。それはいやだなぁ。ごはんは」
静「ごめんなさい。いまつくってるとこ。掃除に時間かかっちゃって」
武夫「そんな掃除したの」
静「あなたの洗濯物が多かったんです」
武夫「そんなこと言ったてなぁ。しょうがないよ」
静「だから、もう少し待ってね」
武夫「はいはい。あ、この匂いはおでんかな」
静「ふ、ほんとおでん好きね」
武夫「え、あたり？」
静「さぁ、どうでしょう」
武夫「あたったでしょ」
静「さぁ」
武夫「これは当たったな」
静「どうでしょう」
静、台所の方へ行く。
武夫、書き物を始める。
慎司、下手から出てくる。
慎司「帰ってたんだ」
武夫「あぁ、今帰った」
慎司「、、」
武夫「晩飯食ったか？」
慎司「食った」
武夫「、、そっか」
・・・
武夫、言葉が見つからず、書き物に戻る。
・・・
慎司「何書いてんの」
武夫「ん？」
慎司「それ」
武夫「あぁなんだろう。小説、、かな」
慎司「、、恥ずかしくないの？」
武夫「え？」
慎司「意味ないじゃんそれ。誰にも見せないんだろ」
武夫「まぁ、そうだな」
慎司「母さんも言ってたよ一度も読んだことないって」
武夫「そう、だったかな」
慎司「そんな意味ないことしてないで別のことやればいいのにって思ってたよ、母さんだって」
武夫「、、、、そんなことない」
慎司「あそう」
慎司、出かける。
武夫「こんな時間にどっかいくのか」
慎司「今日は帰ってこない」
武夫、残される。
間
紙をグシャグシャにし、抱きしめて泣く。
静、台所から出てくる。
静「どうしたの」
武夫「、、」
静「どうしたの」
武夫「笑われた」
静「なにが？」
武夫「、、」
静「なに？」
武夫「、、」
静「小説？」
武夫「うん」
静「誰かになにか言われたの？」
武夫「、同僚が、みたいって言うからみせたら、ここぞとばかりに笑われた」
静「えぇ、見せたの」
武夫「うん」
静「なんで」
武夫「いやだからみたいって言うから」
静「わたしには見せてくれないのに？」
武夫「え」
静「私だって何回もみたいって言ってるじゃない。なのに全然見せてくれないのに会社の人には見せるの？」
武夫「えそれは違うじゃん」
静「なに、私よりその人の方が信頼できるんだ」
武夫「いや、信頼とこれとは関係ないでしょ」
静「じゃあ、なんでわたしには見せてくれないのよ」
武夫「いやだってそれは、」
静「なに？」
武夫「、みせないよ」
静「なんでよ。みせてよ、いいじゃん。」
武夫「だって、それはだめだろ」
静「なにがだめなのよ」
武夫「それはだって、あれだろルール違反だろ」
静「なにそれ。なんのルールよ」
武夫「知らないけど、だから、ダメなもんはダメ」
静「なによそれ」
武夫「ダメです」
静「じゃあイライラしないで」
武夫「、、ごめん」
静「はい。ご飯にしますか？」
武夫「うん」
静「今持ってくるからね」
武夫「うん、、ありがとう」
静、台所にはける。
慎司、玄関から。
慎司「ねぇ、おとうさん早く」

武夫「そんなに焦らなくても大丈夫だよ」
慎司「始まっちゃうよ」
武夫「大丈夫だって。まだ開会式まで３０分もあるだろ」
慎司「その前に友達と組体操の練習するの」
武夫「わかったわかった。母さん靴下どこいったの」
静、台所から。
静「えぇ、タンスの中でしょ？」
武夫「はいってないよ？」
静、出てきながら。
静「洗濯かしら」
武夫「明日使うから洗濯しないでっていったじゃん」
静「うんだからタンスに入れたと思ったんだけど」
武夫「ちょっとお」
静「本当にはいってない？」
武夫「入ってないから言ってんだろ、、、あ、あった」
静「もう」
武夫「ごめん」
慎司「はやく」
武夫「はいはいはいはい。んじゃ、行ってくる」
静「あんまり張り切って怪我しないでね。私もお弁当つくったら行きますから」
武夫「はいはい」
静「いってらっしゃい」
慎司「おとうさん」
武夫「はーい。今行く。いってきます」
武夫、玄関から出ていく。
静、部屋の片付けをする。
慎司、帰ってくる。
慎司「ただいま」
静「おかえりなさい」
慎司「そんな動いていいの？」
静「うん。大丈夫大丈夫。なんか気分いいし」
慎司「あんまり無理しないほうがいいよ」
静「大丈夫だから」
慎司「お父さんは」
静「今日はちょっと遅くなるみたい」
慎司「そっか」
静「なにか聞きたいことでもあったの？」
慎司「ん、いや。いつもはこの時間いるから」
静「そうね。いつもは仕事終わったらすぐ帰ってくるからね」
慎司「うん」
静「こういう日があってもいいんじゃない？」
慎司「そうだね」
静「ごはんは？」
慎司「ん、まだ」
静「じゃあ今用意するからまっててね」
慎司「あ、俺やろうか暇だし」
静「大丈夫大丈夫。なんか宿題でもしてなさい」
慎司「はいはい」
静、台所へはける。
慎司、カバンからノートなどを取り出す。
慎司「そういえばさ、今日の練習でさ」
静「うん」
慎司「武田のセンタリングが少しずれてさ、とっさに足出したらボレーシュートみたいになった」
静「武田君って刈り上げてる子？」
慎司「そうそう。クラス一緒の。なんか、それだけ見るとプロっぽかったよ」
静「偶然なんでしょ？」
慎司「いやそりゃ偶然だけど、偶然でさえできなかったら必然でできないでしょ」
静「何それっぽいこと言ってんの」
慎司「いやだってそうだろ」
静「そういうもんなの？」
慎司「そういうもんなの。いやもうすごかったんだから。なんだよ試合だとひとり抜いただけで、ありえないくらいのテンションになるくせに」
静「実際に見るとまた違うのよ」
慎司「まぁ、そりゃそうだろうけどね」
静「お父さんが今度試合見に行くかって言ってたわよ」
慎司「プロの？」
静「じゃない？」
慎司「え行きたい行きたい。どこたいどこだろ」
台所の方で倒れる音。
慎司「いやでも今日のボレーはプロの試合でもなかなか出ないだろうね。いや本当にすごかったんだよ？」
間
慎司「ねえ」
間
慎司「ん、母さん？」
慎司、台所へ。
慎司「え、お母さん。お母さん！」
慎司、電話をかける。
慎司「もしもし？すみません親が倒れたんですけど。あ、はい。住所はすぐ近くの、花屋の向かいです。そうです、セブンの隣の。はい。お願いします」
慎司、下手へ。
間
武夫、帰ってくる。少し酔ってる。
武夫「ただいまー」
・・・
武夫「ただいまー。あれだな。久しぶりに飲むと肝臓がもうだめだな。そんな飲んでないのに結構まわっちゃった。おーい。お土産かってきましたよ。おでんですけどね。ん？かあさん？おーい。静？慎司？あれ、、、どっか出かけたのかな」
武夫、ちゃぶ台に座ってものを書き始める。
静、台所から出てくる。
静「ねえ、ホントはどっちなの？」
武夫「え、なにが？」
静「覚えてるの覚えてないの？」

武夫「ん？」
静「だから、今日が何の日か」
武夫「結婚記念日だろ」
静「なんだ覚えてんじゃん」
武夫「そりゃ覚えてるだろ」
静「じゃあさっきのはなんだったのよ」
武夫「ユーモアだよユーモア」
静「何がユーモアよ。ほんとに忘れてんのかと思った」
武夫「そんなわけないだろ」
静「でも私の誕生日は忘れましたよ、この前」
武夫「、ユーモアだよ」
静「忘れてました」
武夫「ごめんて」
静「ほらぁ、忘れてたんじゃん」
武夫「違うよ、忘れてたんじゃなくて、ちょっと思い出せなかっただけ」
静「それを忘れてるって言うんです」
武夫「ごめんって」
静「謝って済むなら警察はいらないわよ」
武夫「ごめんごめん」
静「でも、今日は覚えてたわね」
武夫「そんなに忘れないよ」
静「ちゃんと覚えとかなきゃダメよ」
武夫「うん」
静「書かないとわすれるんだから」
武夫「書いたって忘れるときは忘れるよ」
静「忘れたって書いてあるのをみたら思い出すでしょう」
武夫「どこにしまったかも忘れちゃうんだから」
静「なに、開き直り？」
武夫「そういうんじゃないけど」
静「忘れんぼさん」
武夫「その分新しいことに頭がいってるから」
静「そりゃようございました」

間

武夫「名前考えたんだ」
静「え、もうですか」
武夫「男の子だろ？」
静「そうみたいですけど」
武夫「慎司。慎むに司る」
静「なんでですか？」
武夫「慎むっていうのはね、みんなに分け隔てなく気を配るってことなの。それで、司るは、そういう役割を一生懸命するってこと」
静「いいんじゃないですか」
武夫「だろだからきっと優しいやつになるんだよ」
静「そうですね」
武夫「聞かれるかな？」
静「何がですか？」
武夫「ほら、なんでこの名前にしたのって」
静「さあ、どうでしょう」
武夫「聞かれたら、静が答えてな」
静「なんでですか」
武夫「恥ずかしいだろう」
静「そういう時くらいしっかりしてください」
武夫「えぇ」

・・・

武夫「おかわり」
静「はい。ほんとに好きねおでん」
武夫「出汁がうまいんだよ」
静「結構大変なのよ、これ」
武夫「うん。やっぱ手間隙かけたもんはうまいんだよ」
静「料理しないくせに」
武夫「毎日いいもん食ってるから舌が肥えてるんだよ」
静「さいですかさいですか」
武夫「そうそう」

静、下手にはける。
慎司、下手から出てくる。

慎司「なにやってたんだよ」
武夫「、、」

・・・

慎司「、、なんでいなかったんだよ、、」
武夫「、、すまん」
慎司「、、もう遅いよ」

慎司、玄関から出ていく。
ひとり残される武夫。しばらくして書物を始める。はじめはゆっくりと。徐々に何かに取りつかれたように。
静、台所からでてくる。

静「もう寝ますよ」
武夫、聞こえていない。
静「ほら。寝ますよ」
武夫「あぁ。もうちょっと」
静「いっつもそこからが長いんだから」
武夫「今書かないと忘れちゃう気がするんだよ」
静「大丈夫ですよ」
武夫「ダメだよ忘れちゃったらどうするんだよ」
静「明日忘れちゃったら明後日思い出せばいいんですよ」
武夫「もっと忘れちゃうよ」
静「なんですか。もっと忘れるって」
武夫「いやなんかこう、どっかにいなくなっちゃうんだよ」
静「あれ、知ってる？」
武夫「なに？」
静「記憶ってね、なくならないらしいわよ」
武夫「どゆこと？」
静「なんかね、一度記憶されたものがなくなることはないんですって、人の脳って」
武夫「えぇそうなの？えじゃあ、忘れごとはなんなの」
静「それは今見つけられないだけで、頭の中には必ず残ってるんですって」

武夫「ホントかなぁ」
静「ホントなんじゃないですか？」
静、そう言ってふたり分の布団を敷く。
静「ほら、だから片付けて」
武夫「はいはい」
静、布団に入って。
武夫「寝るまでの準備が早いこと早いこと」
静「なんですか？」
武夫「いや、なんでも」
間
武夫「電気消す？」
静「うん」
武夫、電気消す。
間
静「ねぇ」
武夫、布団に入りながら。
武夫「ん？」
静「好きって言って？」
武夫「えぇなんで」
静「いってよ」
武夫「なんでよ」
静「いいじゃん、たまには」
武夫「やだよ恥ずかしい」
静「いいじゃん、私しか聞いてないんだから」
武夫「そりゃそうだけどさ」
静「ほら」
武夫「こういうのはそう言われて言うもんじゃないだろ」
静「いいじゃん」
武夫「えぇ？」
静「ほら」
武夫、枕をかぶる。
武夫「(枕のせいでなんて言ってるかわからない)」
静「えぇ？なんて？なになに？なによちょっと」
静、そう言いながら武夫の布団に潜り込む。
間
慎司、帰ってくる。台所に行く。帰ってくる。手にはおでん。ちゃぶ台に座り、武夫を一瞥し。
慎司「ただいま」
溶暗